

広島県西部建設事務所安芸太田支所の 人権学習会と現地学習会

川原 洋子

5月末、広島県西部建設事務所安芸太田支所の担当者から継承する会事務局宛に、人権学習会の講師依頼のメールが届いた。所内研修の一環として人権学習を年数回実施していて、安野発電所への中国人強制連行問題を取りあげたいという。同支所は、安芸太田町と北広島町を所管し、管内の道路や河川など公共土木施設の整備・維持管理を業務としている。所在地は安芸太田町加計で、太田川水系の滝山川と丁川の間に位置し、加計市街地のすぐそば。安野発電所は滝山川の水を取り込んで発電しているが、土居取水口にも近い。継承する会のホームページで、安芸高田市職労や原水禁のプログラムとして行なったフィールドワークの報告を見て、人権学習会のテーマとして考えたという。

11月2日午後、私は同支所で「中国人強制連行、労働と生活の実態」と題して話をさせていただいた。学習会は、仕事の関係で全員が一度に参加できないため、75分ずつ2回に分けて実施され、1回目は21人、2回目は18人が参加された。

中国人強制連行について簡単に説明した後、DVD「50年目の叫び—広島・安野への中国人強制連行の真相」（1997年制作、27分）を上映。「安野マップ」を使って、4カ所の中国人収容所があった位置などを確認。トロッコとマントウの模型を使って、過酷だった労働と食糧が十分に与えられなかった実態を伝えた。また、スクリーンに生存者7人の写真を映して、それぞれの証言を紹介した。

坪野、津浪、香草、土居など中国人が収容され労働させられていた地名もその場所もよく知っておられる人たちがばかりなので、身近に感じていただけたと思う。

後日、教えていただいたところによると、「職場の近くであったことを聞いてよかった」、「想像することはできるが、実際には自分の想像をはるかに超える実態だったのだろう」などの声があったという。

学習会に続いて強制労働の現場を訪ねる現地学習会が計画されていることを知り、私は案内役を申し出た。話を聞くだけでなく、現地を訪ねて理解を深めようという熱心さに心を動かされたからである。

学習会から3週間後の11月30日午後1時半、「安野 中国人受難之碑」前で職員の皆さん19人と合流した。坪野～津浪～香草～土居と巡っていく。

はじめに代表者が記念碑に献花してから全員で黙とうし、現地学習が始まった。記念碑を見ていただいた後、山道の階段を上って坪野貯水槽まで行った。貯水槽から望む道路や民家の様子は当時とあまり変わっていないので、当時の写真と見比べることができる。

次に、6台の車に分乗して津浪に向かった。現在は田んぼになっている津浪収容所跡で、岡田ヒデコさんの証言などを紹介した。

それから香草に移動して収容所跡で説明した後、車を大元神社の裏に置いて、歩いて工事現場跡まで行き、歩いて戻った。中国人が仕事の行き帰りに歩いた道だ。私自身、20数年ぶりであり、歩くことの大切さをあらためて感じた。工事現場跡では、宋継堯さんが失明したトロッコ事故について説明した。宋さんの帰国後の生活について質問もあり、当時の労働条件の劣悪さや失明した宋さんに想いを馳せていただけたと思う。

土居取水口では、中国電力の職員から説明を受けた後、自宅の離れを貸していた警察官が中国人に親切にしていたという郷田フミコさんの証言を紹介した。

最後に、「大元神社の境内に「日清 日露 日独戦捷碑」があるが、中国の人たちはどんな思いで見ただろうか」、「アメリカが日系人収容の歴史を、ドイツがナチスのしたことを資料館などで公開しているように日本でもこのような歴史を公開するべきと思う」などの感想が述べられた。皆さんの真剣さ、真摯さがよく伝わってくる現地学習会だった。

安野発電所に近いところを職場とする皆さんに知っていただく機会を得て、本当にうれしく思いました。